「もったいない」の精神と高い志 〜風土に培われた日本人の資質〜

宮下佳廣

師走、一年をふり返る時期の到来です。英国放送協会(BBC)が毎年行っている「世界に、良い影響を与えている国」の調査で、2013年、日本は例年の1位から4位に転落しています。これは中国、韓国との足の引っ張り合いや安倍政権の経済政策が理由と思われますが、それでも4位にとどまったのは、世界中の人々からの日本への信頼の高さを示しているといえます。この好感度の要因と考えられる日本人の良さについて、二人の賢人の見方を紹介したいと思います。

2005年に来日した、ケニア出身で環境分野初のノーベル平和賞受賞者のワンガリ・マータイさんは、日本語の「もったいない」という言葉に感銘を受け、そのまま「MOTTAINAI」を世界共通の言葉として広めていきました。日本人が持っている自然や人や物に対する敬意・愛などの概念を、このような一語で表せる言葉が他の国には見つからなかったためでした。この「もったいない」という言葉には、単なるエコや節約という狭い意味だけでなく、あらゆることに対し感謝をする、無為なことをしてはもったいない、という広い意味が含まれています。

また、日本を代表する作詞家・作家で、淡路島出身の阿久悠は、「日本人が持っている資質」として 1. 器用 2. 勤勉 3. 正直 4. 優しい 5. 頭がいい 6. 綺麗好き 7. 努力家

8. 愛国者 9. 謙虚 10. 忍耐強い 11.シャイ 12. 礼儀を重んじる 13. 志が高い の 13 項目をあげています。この中で、私は、特に最後の「志が高い」が大切だと思います。

これらは、日本がユーラシア大陸の東端にある島国であるという地勢的条件に、さらに、あ ざやかな四季の変化をもたらす一方で地震・噴火・台風等の災害を招く自然条件が加わって培 われてきた精神文化の産物で、他国にはないと考えられます。

今、時代は人口減少化に伴い、「成長から成熟へ」の大きな変革期に差しかかっております。その中で、私達は、これからの時代におけるあるべき国の姿や企業の在り方、人としての生き方をよく考え、山積する問題の解決に向けてみんなで一致協力してチャレンジしていかなければなりません。その時の原動力となるのがこれら日本人の資質です。みなさんも、この一年間を振り返づて、「もったいないの精神」で日々充実した時間を過ごしてきたか、そして、千代田で満足できる仕事ができたか、さらに自分がこうなりたいと思う「高い志」を着実に実行してきたかを、自分自身に問いかけてみてください。前月の便りの「たった一度しかない一生を生かす」も、まさに、この「もったいないの精神」と「高い志」につながることと思います。このことを念頭におきながら、新しい年の課題を考えてほしいと思います。終わりに、言葉の宝石箱といわれた阿久悠の詩の一節をおくります。

心を砂漠にしてはいけない乾いた心に夢は湧かない

北に一星あり、小なれどその輝き強し ~母校の建学精神と千代田の経営理念に共通するもの~

宮下佳廣

私の母校の小樽商科大学は、明治 43 年 (1910 年) に設立された官立小樽高等商業学校が前身で、当時は神戸高商・長崎高商と並んで三高商と呼ばれておりました。商学部だけの単科の小規模な大学でしたが、貿易の盛んな港町小樽に立地していることから、経済学・語学といった実学を重視しつつ、ひとりの人間としての人格を磨くことが学風となっておりました。この学風を表すものが校訓の「北に一星あり、小なれどその輝き強し」という建学の精神です。

卒業後、私が入社した出光興産においても、創業者出光佐三は、会社の規模が大きくなっても小さな商店の主人の気持ちを忘れないようにと、社内では『店主』と呼ばれておりました。新入社員は、一日も早く社会人として逞しく成長してほしいとの親心から、必ず出身地と離れた小規模の店に配属されるのが習わしで、北海道出身の私の最初の赴任地は四国の徳島出張所でした。職場では、経営の理念として「一人一人が経営者たれ」の考え方が徹底されておりました。何か業務上のトラブルに出会ったとき、上司に「どうしたらよいでしょうか?」と聞くと厳しく叱られ、直ちに「お前ならどうするのか!」と突き返えされるのが常でした。在学中は「小なれどその輝き強し」の訓えはあまり意識したことはありませんでしたが、小さな職場で叱られていると、ふと、母校の校訓を思い出し、人が成長するための場として学校も会社も相通ずるものがあると感じておりました。

昨年からみなさんとご縁ができ、いろいろな機会を通して千代田の社風を感じてきました。透明で公正な経営、顧客の視点に立った営業、真面目で向上心の高い社員等、大企業にはなかなか見られない、小企業だからこそできる独特の優れた部分が多く見受けられます。ある営業所の懇談会で「千代田という会社は突き詰めると何だろうか」と難しい質問をしたところ、「社員一人一人です」という素晴らしい答えが返ってきました。取引先からの「千代田の社員は目が輝いている」という評価は、私の母校の校訓にある「小なれどその輝き強し」に相通ずるものがあると思います。このような気概をもって、みなさん一人一人が難局に恐れず真正面からぶつかれば、千代田の未来は必ず開けてくるはずです。

一年の計は元旦にあります。毎年、年の初めに口ずさむ中村草田男の句を皆さんにご 紹介します。はまなすは、北海道の海岸に多く見られるバラ科の植物で夏に赤い花を咲 かせます。

はまなすや 今も 沖には未来あり

鉄は魔法使い 〜気仙沼の牡蠣漁師畠山さんのことば〜

宮下佳廣

先日 N 社が関係する朝食会で、京都大学社会連携講座教授の畠山重篤さんから「鉄は魔法使い」という話を聞きました。畠山さんの本職は三陸気仙沼の牡蠣養殖の漁師で、良い牡蠣を育てるには海だけではなくそこに注ぐ川の上流にある森を整備することが大切だとして「森は海の恋人」運動を 25 年前から続けておられます。この運動を始めたきっかけは、海の岩が真っ白くなり海草が生えなくなる磯焼けという現象が起きたことで、その原因は森林が伐採された事実であることを突き止めました。多くの専門家の意見を聞き研究を重ねた結果、森林には鉄分を供給する役目があり、この鉄分が不足すると海草が生えなくなることが判りました。ここで初めて、森と川と海が一体の繋がったものであること、そのなかでも「鉄が最重要である」という結論にたどりついたのです。この活動により、2011年に国連から「フォレストヒーロー(森の英雄)」として表彰されました。

私達が住む地球は表面の70%が海で「水の惑星」と呼ばれていますが、重量でみると35%が鉄のむしろ「鉄の惑星」と呼ぶのがふさわしいのです。鉄と人間との関連をみると、人体には釘一本分の鉄が含まれており、その鉄は血液中のヘモグロビンの中心にあって肺から取り入れた酸素を身体の隅々まで届ける重要な役割を果たしています。微量であっても鉄は人間にとって不可欠なもので、この鉄分が不足すると貧血になり、日常生活に支障をきたします。身近な例として、植物をみても盆栽の鉢植えの松の根に釘を差し込むと松の葉が元気になったり、調理時に鉄を使うときれいな色が保たれます。鉄は人間にとって最も大切な資源の一つであると同時に、私たちの知らないいろいろな顔があります。このように鉄には、日常のビジネスで理解している役割を超えた「魔法使い」ともいえる大きな力があります。

畠山さんの話から学ぶことは次の三点だと思います。

(1) 俯瞰して全体をみることの大切さ

牡蠣の養殖の場である海だけを見るのではなく、鳥のように空から全体をみると、海〜川〜森が繋がっていることが判り、この中から「森は海の恋人」運動が生まれています。

(2) 本質を探求していく姿勢

なぜ森が必要か、鉄が植物の光合成にどう繋がるかなど、植物学や化学の専門家のもとへ足しげ く通い、森の重要性、なかんづく鉄の役割をつかんでいます。千代田でいう「玉ねぎの皮をむく」 は、それに当たるといえます。

(3) 新たな発見から勇気をもらう

大震災からの復興に取り組むにあたり、森〜川〜海の繋がりがしっかりし、鉄が十分に供給されれば「美しいふるさとは蘇る」と発見したとき、畠山さんには大きな勇気がわいてきたそうです。

千代田のみなさんには、お客様と接するビジネスの現場においても、この畠山さんの姿勢に学び、 全体を俯瞰し、本質を探究しながら、新たな発見を重ねて行っていただきたいと思います。そうす れば、その中から大きな力や勇気が生まれてくるにちがいありません。

この国の力はすごい ~大震災から3年を経た今、次世代へつなぐもの~

宮下佳廣

東日本大震災から丸三年を迎えようとしています。前号で紹介した畠山重篤さんが住む気仙沼も 壊滅的な被害を受け、人口 7 万の町の内千人 (畠山さんのお母さんもその一人) が亡くなりました。 氏は、多くの遺体の安置と火葬が集中する中で、大変な仕事を整然と進める地域とボランティアの 人々に感謝すると同時に、この国を支える人達の素晴らしさを実感し、「この国の力はすごい」と 講演で述べています。

同様の話として、震災時に被災地を訪れた世界銀行職員からワシントンの西水美恵子副総裁のもとへ「このようなことは、他の国ではまずありえない。彼等は心底から尊敬できる人達だ」と驚嘆した報告が送られています。その内容は、「停電時、レジに並んだ人々は品物を棚に戻して店を出た(Conscience 良心)、悲痛に取り乱す姿など見当たらない、悲しみそのものが気高い(Calm 平静)、水や食料を得るための正しい行列のみ、無作法な行動はない(Dignity 威厳)、人々は、皆が何かを買えるように、必要なものだけを買った(Grace 品格)、店舗では略奪が起こらず、路上では車の追い越しや警笛がない(Order 秩序)、レストランは値段を下げる、無警備の ATM(Tenderness 優しさ)、老人も子供も、すべての人が何をなすべきかを知り、行った(Training 教育)」というものでした。世界の各地で起きている災害では、米国ハリケーンやフィリピン台風で見られたように、天災の後に来る略奪等の人災の方が怖いといわれます。西水さんは、このような私達が当たり前と思っていることが、世界中の人々から「この国の力はすごい」と驚異の念をもって讃えられていることに、日本人はもっと自信をもつべきだと述べています。

いま、日本の将来を考えるとき、私達は他の国にはないこの「すごさ」、いいかえれば素晴らしいこの国の伝統や日本人らしさを次世代へ伝承していかねばなりません。この基本は、あくまで「人を育てる」という人材教育の重要性です。人材の育成なくして日本の未来はありえません。我が国が近代国家として成長を遂げた明治時代の基礎は、江戸時代の藩校や寺子屋の教育でした。これは、国の在り方だけではなく、企業活動においても同様です。日本資本主義の父といわれる渋沢栄一も、企業活動の要諦は「論語と算盤」と唱えています。私自身も出光で、「管理者の役割は、経営課題達成と部下育成が両輪である」と、厳しく教えられてきました。

千代田の未来は、「いかに人が育つか」にかかっています。そのために、役員・管理者・先輩社員のみなさんが今まで以上に厳しくかつ愛情をもって、若者を鍛錬し育成していくことが重要です。その結果、一人ひとりが仕事を通して成長していく実感をもち、それが業績の向上につながります。「人を育てる企業」という千代田の伝統を継承していくことが、一企業のみならず日本の国の発展につながるということに、自信をもって取り組んで欲しいと願っています。

さあ、始めよう! Let's get started 〜新しい事業年度を迎えて〜

宮下佳廣

4月の新しい事業年度のスタートにあたって、「恥をかくことを恐れず何か始める」ことの大切さについてお話いたします。それは、先般私が紹介された NHK - E テレ「団塊スタイル」のコメンテーター姜尚中さん(熊本生まれの在日韓国人二世、東京大学の教授をされた政治学者)からも番組の中で同様の発言がありました。

一例をあげますと、私の千葉大学での学び直しのきっかけも、そんなに難しいことではなく「とにかくやってみよう!」ということでした。まず研究室では、若い学生にパソコンを初歩から習うことから始め、夕方からはビール片手に人生論を交わし若い人たちの感性に触れることができました。教室では親子程年の離れた教官から6年間にわたって講義を聞き、レポート提出やテストで厳しい指導を受けました。現在は研究から地域社会の再生をめざす『鎮守の森コミュニティ』を千葉大学廣井教授と一緒に立ち上げました。このような一連の経過は、最初から意図したものではなく、「何か始めてみよう」からスタートし、その過程で多くの方々からの感化や励ましを受けて今日に至っています。

一方で、新しいことを始めるに際し、大事なことは「成功体験を積む」「他人がやってできた様子を見て自分もできそうと感じる」「誰かに"君ならできる"と言われる」「気持ちのいい状態でやる」ということがポイントとなります。個人一人では作りづらければ、会社やチームという組織全体でこれらを引き出す環境をつくり、一人ひとりの新しい取り組みをし易くする必要があります。

Let's get started!始めることにふさわしい新しい年度にあたり、仕事は言うまでもなく、学習やものの考え方、人間関係、健康づくり、余暇、等に関して、新しいテーマに取り組むことを始めてみませんか?そして熟考し準備をしたら、ためらわずに一歩を踏み出すことです。必ず、道が開かれ、次第に景色が変わっていきます。その結果みなさんは「始めること」による大きな収穫や多くの友人を得たことをきっと実感されることでしょう。さあ、始めよう!未来はこれから!